



十一 フィナーレ

「いやあ。三十周年記念リサイタルもそろそろ終わりやで。いないよちゃん」

「ほんまやなあ。いたよちゃん。お笑い始めて三十年はあつという間やったのに、リサイタルは長く感じるのは何でやろ。ほら、もう舌が疲れ果てて、べろべろや。普段の二倍にふくれあがってしもうたわ」

いないよがお客さんにむかって、口から舌を出し入れする。

「あんた。体だけやのうて、舌まで太つとんのやなあ」

「何、今さら感心してんのや。そりゃ、当たり前や。体が太つといて、舌だけがやせとったら、バランスが崩れてかっこ悪いやろ」

「そのドラム缶を引つけたような体の、どこがかっこええんや」

「ええやんか。魅力的やろ。この豊満な体。心も体も豊かな証拠や。昔は、高貴な方は財力の象徴として、栄養満点で豊満やったんや。太つとんと違うで。豊満なんや。反対に、庶民は十分食べられんかったからガリガリでやせとったんや。どうや」

「何、そのドヤ顔。ほなら、あんたは生まれてくるのが千年遅かったということかいな」

「まあ、そういうこつちやな」

いないよはドヤ顔のまま、腰に両手を当て胸を張る。

「あんたはおめでたいなあ。でも、これからは、人口が爆発的に増える割りに食糧生産が追いつかんから、食糧難の時代が来るで。そうなったら、できるだけ、スマートで、エネルギーを使わんエコな体がええんとちゃうか」

「何、いよんかいな。それは反対や。食糧難やからこそ、体に蓄える施設をもっとの方が長生きできるんや。ガリガリやったら、あつという間に、体が衰弱してしまうで」

「その三段腹、いや五段腹は、らくだのコブかいな。どうりで、いつまでたっても、やせんとおもとったわ。ほんなら、お腹が減った時は、いないよちゃんのお腹にかぶりついたらええんかいな」

「そうや、そうや。いつでもおいで」自分の太鼓腹を叩くいないよ。

「この前も、家を新築した親戚から棟上げに呼ばれたんや」

「何で、棟上げに呼ばれるんや。何か、関係しとんのかいな」

「二階のお立ち台から、お腹の肉をちぎっては投げ、ちぎっては投げ・・・」

「あんたのお腹はおもちかいな。そんな肉もち食うたら、お腹こわすで。保健所に捕まるで」

「こわすどころか、その肉もちがお腹にひつつくんや。これで、食糧不足になっても大丈夫や」

「こぶとりじいさんやのうて、肉もちばらまきおぼさんかいな。もう、ええんかげんにして！」

終わった。なんとか持った。いないよには見えないだろうけれど、あたしの髪の毛は、蜘蛛の糸のように空高く伸びている。顔もムシクの叫びように細長く伸びている。めまいがしそうだ。だが、何とか終わった。役目は果たせた。ありがとう。いないよ。あたしが本当にいなくなっても、もう、一人で大丈夫。空から活躍を見守るわ。もし、万が一、いないよも空に昇ってき

たら、今度は、天国の舞台に立って、神さんたちを笑わしてやろう。さよなら。

あーあ。疲れた。あーあ。ようやく終わった。本当に、どこで終わるのかわからなかった。いたよとはある程度、ネタを決めていたけれど、思わぬ突っ込みが入るため、ボケるのが大変だった。いたよは、あたしのどぎまぎする顔をいつも横目で楽しんでいる気がする。でも、それがかえって、新たな笑いを生み出す力となった。ある程度のストーリーは必要だけど、それじゃあ、あたしたちが面白くない。あたしたちが面白くないと、それを見たり、聴いたりしているお客さんも面白くない。はずだ。

だから、いつも、いたよは、わざと、意図的に、その場のお客さんの状況を瞬時に感じて、何が受けるかをひらめいて、その話題を突っ込んでくる。全く何も無い、無のところから、笑いを生み出す。それは、コンビによってやり方は異なるだろうけど、あたしといたよの笑いは、こうして生まれている。二人の丁々発止、真剣勝負なのだ。

だけど、このお笑いもとりあえず終わった。本当に疲れた。脳みそが頭の中の洗濯機でぐるぐる回転し過ぎて、鼻や耳から溶けだしそうだ。あっ、これは面白いネタだ。忘れないうちに、メモっとう。お笑いから二十四時間、三百六十五日、四十年間、離れられない。だからこそ、脳がジュースになるのだろう。とにかく疲れた。いたよ。本当にありがとう。また、少し休んだら、三十一年目のお笑いが始まる。いたよ。楽しみにしてるで。

アンコール。アンコール。お客さんが拍手しながら立ち上がる。お笑いコンサートでアンコールだなんて聞いたことがない。舞台の袖で、いないよといたよ人形は顔を見合わせてとまどっている。

「何をためらっているの。アンコールよ。お客さんが呼んでいるわ。早く、舞台に立ちなさい」
傍らのマネージャーが微笑んでいる。

「そうだよ。いないよ。お客さんがいたよ・いないよのお笑いに感動したんだよ。もう一度、お笑いで感動させてやれよ」舞台監督がいないよの肩を叩く。

「でも、ネタが・・・」いないよが呟く。

「そう、ネタが・・・」いたよも繰り返す。

そう、いないよといたよはネタを全て使いきっていたのだ。

「何よ、ネタなんて必要ないわ。いたよ・いないよのコンビの存在自体がネタなんだから」マネージャーがやさしく微笑む。

「そうだよ。お客さんはあんたたちの顔をもう一度見たいだけなんだよ」舞台監督が二人の肩を叩く。いないよといたよ人形はお互いに顔を見合わせる。

「やろう。いないよ」先に口火を切ったのがいたよだった。

いたよ人形の顔をじっと見つめるいないよ。

「わかったわ。いたよ」

いないよはいたよ人形を抱えたまま、舞台に飛び出した。

「どうも」

「どうも」

二人のこの声にお客さんからの拍手が一層高まった。と、その時、いないよの態勢が崩れた。あまり急いで走ったので、ふとももとふとものがぶつかり合い、足がもつれたのだ。

あつ。自分の体が倒れていく。出だしと一緒だ。最初、転んで立ち上がったのに、最後もまた、転ぶのか。あたしのお笑いは転びで終わるのか。そう思う間もなく、目の前に、舞台の床がだんだんと近づいてくる。まるでスローモーションだ。でも、一旦、崩れ出した体は態勢を立て直せない。刻々と近づいてくる舞台の床。だが、左手にはいたよ人形。このままだといたよを潰してしまう。じゃあ、どうする。自分の顔面で受けるのか。これ以上、顔の形が変わるわけではないだろうけれど、顔から落ちるのはやはり痛い。目と鼻と口の先にまで近づいた舞台の床。もう、だめだ。と思う間もなく、咄嗟に右手のてのひらが出た。五本の指が広がっている。親指、人さし指、中指、薬指、小指とそれぞれの指にいないよの体重がかかっているのが感じられる。この五本指であたしの体重が支えきれぬのか。

いないよの体重の圧力が指からてのひら、手首、ひじ、右肩に押しあがっていく。もうだめだ。耐えきれない。あたしの体なのに、あたしの右手だけでは支えきれない。その時、右ひじがくの字に、ぺちゃんこ字に、折れ曲がった。と、同時に、いないよの体は右肩からくるっと回転した。そして、その回転の勢いで、そのまま立ち上がりたいないよ。

観客席からは盛大な拍手が起こる。何がなんだか分からないままのいないよであったが、お客さんの拍手で、これまでの芸歴の経験がいないよに瞬間的にガッツポーズをさせた。更なるお客さんからの拍手。そう。二転び三起きだ。あたしはどんなに転んでも立ち上がることができるんだ。

「どうも。どうも」頭を掻きながら、つい、お客さんに向かってドヤ顔になるいないよ。

もうだめだ。このままつぶれるのか。それでも、いい。これまで、いないよのおかげでここまでやれたんだ。いたよはいないよに身をゆだねるしかなかった。だが、意外なことに、いないよが転んだのにも関わらず、回転して立ち上がった。回転レシーブだ。

いないよって、シフトボールだけじゃなく、バレーボールもやってたの？こんなにも身軽だったの？でも、そう言えば、中学、高校の時、あたしの投げたボールをバッターの頭の上を越すような暴投でも、ワンバウンドでも全てキャッチしてくれた。身軽じゃなかったら、そんなことはできない。さすが、いないよ。いたよはお客さんと同じように拍手をしようとした。だが、その時。

あつ、だめだ。いたよの体は人形から離れ、上へ上へと登っていく。これまでなんとか、いたよ人形にしがみついていたものの、いないよが回転した振動で、その手も離れてしまった。いたよ人形の頭、いないよの頭、お客さんの姿、劇場の屋根、建ち並ぶ多くのビル群、どんどんと小さくなっていく。ごめんね。さよならも言わないで。でも、楽しかった。いたよは空の上からもう見えなくなったいないよの姿に向かって手を振った。

「どや。この身重な体で身軽な動きのいないよさんはどう？」

いないよはドヤ顔のままいたよ人形に話掛ける。さあ、いたよ、しゃべってよ。あたしに突っ込んで。だが、いないよ人形からは、うんともすんとも返事がない。

「どうしたの。いたよ。転んだ時に、頭でも打ったの？ホントにいたよの過去形になったの？」

お客さんに聞こえないように、小さな声でギャグをかますものの、いたよからの返事はない。その時、いないよは気付いた。本当に、本当に、いたよはいなくなつたんだ。いないよの顔から笑みが消えた。頭の中は霧が湧き出てくるように白くなっていく。何も見えない。何も考えられない。もう、だめだ。折角、いたよが戻って来てくれたおかげで、ここまで復帰できたのに。また、元に戻ってしまう。何か言ってよ、いたよ。だが、今は、舞台の上だ。お客さんが自分を、自分たちを見ている。何か言わないと。その意識だけははっきりしている。

「いたよ。何か言ってよ。あたしの回転レシーブよかったでしょう？」

「どこが回転レシーブや。牛が食べ過ぎて、急に横たわつたんかと思うたわ」

思わず、いたよ人形の口からいないよの言葉が出た。

「あたしはいつから牛になつたんや。これまで、鏡もち腹とか氷山の一角とか言つてたのに」自分のボケにいたよ人形の口を使って自分で突っ込む。

「もう、三十年もお笑いをやっとなやで。同じことばかり言うてどないすんねん。人間は進化する動物や。昨日と違う今日、今日と違う明日。京都大原三千院や」

「ええこと言うけど、なんや、最後の、大原三千院とどういう関係があるんや？」

「京都には、金閣寺や銀閣寺、八坂神社など、有名なお寺や神社があるけど、大原にもええお寺があるということ、つまり、もっと目を見開いて、広く物事を見ろ、というこっちゃ」自分一人なのに、次から次へと二人分の言葉が出る。

「あら、まあ。いたよ、転んで頭打って、頭が可笑しくなつたんとちゃうか」

「何、言うてんねん、あたしらはお笑いをやっとなのや。可笑しいんが当たり前や」

「そりゃそうや。ええこと言うわ」

「お客様。これからも」

「よろしくお願ひします」

いないよといたよ人形は同時に頭を下げた。会場からお客さんの盛大な拍手が再び湧き起こつた。